

キリスト教教育と私 (1)

塩野和夫

序

父の腹にはへそを通して縦に走る大きな傷跡があった。手術の跡ではない。恐ろしそうに傷跡を見る私に、父は説明して聞かせてくれた。

これはな、お父ちゃんが満州で軍隊にいた時のことや。行進していた時に突然道路わきに積んであった材木が崩れ、転がってきた。その一本がお父ちゃんのお腹にあたり、突き破ったんや。軍隊というところは殺生なところだな。倒れていると行進の邪魔になるというので道路わきに置いておかれた。ところが、そこを通った連隊長さんがな、倒れているお父ちゃんを見て「塩野を助けてやれ！」と命令してくれた。お父ちゃんは連隊長の執務室で書記をしていたから、知ってたんや。それでお父ちゃんは助かった。お腹の傷はその時のものや。

父の腹部や海外からの引揚者が住んでおられた敷島寮-1960年代に小学校の同級生で毎年のように保護者が亡くなられ、葬儀が行われたのはこの寮においてであった-など、太平洋戦争の傷跡はいくつも私たちの日常にあった。戦後という特色を刻んだ時期の日本に私は生まれ、育った。その時期が過去になろうとしている¹⁾。

*

半生を振り返ってみて、たった一人の生涯に込められた多くの不思議さに驚き、圧倒される。全く予期しなかった出会いや助け手があって、私は今ここにこのような者としている。様々な出会いの中にある特色で繋がる一群の人々がくっきりと浮かび上がってくる。彼らはキリスト教教育に対する深い情熱と明確な意思を持ち、私の生涯



に決定的な影響を与えた。まさにキリスト教教育によって私は導かれ育てられた。だから、彼らとの出会いを叙述するならば、それは私の魂の軌跡を記す物語ともなる。

駆け落ちをした両親を守り和解によって家庭の平安をもたらし、「うれしいやないか、塩野！」とキリスト教教育への思いを熱く語ってくださった柴田勝正さん。

同志社香里高校の卒業式を数日後に控えたある日、校長室に私を招き「一つ、塩野君にはお願いがある」と同志社のキリスト教教育への志の継承を依頼された生島吉造校長。

大学生一年生の11月から1年半、路面電車の往復運賃で買ったパンを「いつもお世話になります」と言って受け取ってくださった橋の下のおじいさん、よくよく考えてみれば彼との友情もキリスト教教育に育まれた結実の1つである。

これら出会いの舞台となった戦後という時期は過ぎ去りつつある。

*

過ぎ去りつつある戦後という時代認識は、一つの問いを呼び覚ます。戦後という特色を帯びた時期にあってキリスト教教育は一体何であったのか。言うまでもなく、日本キリスト教史や日本キリスト教教育史の分野において、それぞれの研究方法や叙述によって今後この課題は取り組まれていくであろう。しかし、今私は一研究者として戦後日本におけるキリスト教教育に向けたこの問いを受け止めるのではない。そうではなく、戦後に生まれ生きてきた者として、この時代にしか経験できなかった真実を叙述し、いわば一人の時代の証言者としてこの問いに答えていこうとするのである。

したがって、「キリスト教教育と私」は戦後日本におけるキリスト教教育史研究という性格のものでも、その全体像に迫ろうとするものでもない。むしろ、戦後日本にあってキリスト教教育の現場をそれぞれの仕方ですらった人たちの生き方とその真実に迫ろうとするのである。E.トレルチによると、歴史認識は総合性と個性との相互認識によって成り立つ²⁾。したがって、一方ではある時期の総体を把握することによって歴史の全体像を認識し、他方歴史的個体の認識によって歴史的事物を生き生きと理解できる。歴史はその時代を生きた事物の息遣いが聞こえてくるような理解とそれを取り入れた全体像によって正当に認識できる。

*

「キリスト教教育と私」で扱うのは、戦後日本のキリスト教教育を担った人たちと彼らに触発された若い日の私の模索である。それはトレルチの言う「歴史的個体」である。歴史的に有用な個体が多く蓄積されることにより、全体像の内実は豊かになる。戦後日本におけるキリスト教教育という研究課題に私の試みが資することを願う。

1

江戸時代、京都と大坂を結ぶ街道のほぼ中ほど淀川の東岸に「ひらかた」（枚方）という宿場町があった。宿場町の位置は現在ではほぼ京阪電車の枚方市駅と枚方公園駅を結ぶ線路のすぐ北西側（今の枚方市三矢町）であり、1950年代には江戸時代の街並みをかなり残していた。1キロメートル程続くかつての宿場町のほぼ中心の北西側に一軒の質屋があった。1958年にうみのほし幼稚園に入園した時から小学生の間、父は毎年必ず私を連れて新年のあいさつに柴田というその質屋を訪ねた。私の手を引きながら柴田家のお宅が近づいてくると、父はこのように繰り返すのだった。

お父ちゃんはな、柴田さんから受けた御恩は生涯忘れへん。

「柴田さんから受けた御恩」、ずっと後になって分かったことだが、それは柴田勝正が駆け落ちした両親とこの結婚に反対した母方の祖母坂口ナヲとの難しい関係に和解をもたらし、私たち家族がようやく安心してすごせる生活の場を与えてくださったことだった。

*

大阪市近郊で町工場を営む家族の一人娘として坂口恵美子は何不自由のない少女期を過ごした。しかし、戦時体制の強化に伴い政府が金属類の抛出を求めた時、彼女の境遇は一変する。工場の機械は止まり、坂口家は経済的に困窮する。珠算教室の手伝いで得たわずかな恵美子の小遣いも坂口家の貴重な収入となる。中学校を卒業すると、彼女は珠算の出張講義にも出かけるようになる。

軍隊の招集を受け満州で軍人として過ごした塩野元治郎が、戦場を知らずにいたのは幸いだった。だが、敗戦によってロシア軍に捕らわれの身となり、シベリヤへ送ら

れる。乏しい食料と厳しい労働を強いられた日々が、4年あまり続く。1949年によりやく帰国し、訪ねた大阪は廢墟と化し、家族もそこにはいなかった。彼の父は1944年に亡くなっており、残された母塩野ツマは彼の妹ツタエと実家のあった門司に身を寄せていた。帰国後しばらく門司に留まっていた元治郎は、仲間を訪ね仕事を求めて再び大阪に行く。30人ほどの従業員がいた町工場の工場長となって働き始めたのは、それから間もなくのことであった。そこで、塩野元治郎は珠算を教えに来た坂口恵美子と出会い、二人は恋に落ちた。

坂口恵美子の母ナヲが二人の結婚に反対であった。経済的な理由であったと思われる。1950年当時彼女が一家の稼ぎ手であり、珠算教授による収入が坂口家を支えていた。坂口ナヲには塩野との結婚は坂口家の生活に破綻をもたらすと思われ、彼女は元治郎を口汚く罵った。ナヲの反対により結婚は行き詰ってしまう。そこで、恵美子が下した決断は元治郎との駆け落ちであった。着の身着のまま家を出た時、すべての事情を知っていた家主の富沢が恵美子を励ます。彼女は財布を開いて中身のすべてを恵美子に与え、言ったのだった。

恵美子ちゃん、頑張っておいで。

*

枚方市山之上に塩野元治郎が暮らす社員寮があった。1951年の暮れ、坂口恵美子が元治郎を頼って身を寄せたのがこの社員寮である。つましい生活が始まる。食卓になったリングを入れていた木箱の上には買い求めた2膳の箸と2個の茶碗が置かれた。茶碗によそわれたのはコメと麦を半々に交ぜた麦ご飯であった。それでも二人は幸せであった。間もなく恵美子が妊娠する。義母坂口ナヲの突然の訪問による身ごもった妻の身を案じた元治郎は、彼女をしばらく門司の母塩野ツマのもとに送る。1952年11月、枚方市山之上で恵美子は長子を出産する。男子であり、和夫と名づけた。父は顔の相をくずして和夫の誕生を喜んだ。

塩野夫妻は1954年に枚方市牧野阪に転居する。片埜神社のすぐ南にある4軒長屋の2軒目であった。道から見ると4畳半ほどの畳の間が2部屋続き、その奥に台所があった。玄関は部屋の左側にあり、玄関から狭い通路を通過して畳の間に上がることも台所に行くこともできるようになっていた。台所の奥には小さな庭があり、手洗いは

その隅にあった。

牧野阪に引っ越すと塩野恵美子はすぐに珠算教室を始めた。開け広げられた二部屋の畳の間が教室となった。生徒を集めるのに彼女は懸命だった。引っ越してきた家はローンで購入した持ち家だったためである。節約してためた貯金が前金となり、元治郎の給料のすべてはローンに充てた。始めたばかりの珠算教室の収入だけで家族は生活する予定であった。幸い生徒は集まり、20人30人とすぐに増えていった。和夫は珠算が教えられている間、台所で寝かされていた。

だが、すべてが順調に進んだわけではなかった。私の一番古い記憶、それは1955年から56年にかけて牧野阪の家で泣いている母の後ろ姿である。声を殺し、肩を震わせて母恵美子は泣いていた。揺れている肩に母は泣いていると分かった。それは3歳か4歳の私には世界が揺れる出来事であった。原因は祖母坂口ナヲの来訪であった。山之上でもそうであったように牧野阪でも、彼女は居場所を突き止めると坂口家に帰るように説得にきた。大声で話し、時に刃物で脅すこともあった。困惑した恵美子がいくばくかの金を与えると、しぶしぶ坂口ナヲは帰途につくのであった。

恵美子が泣いていたのはいつも奥の台所であった。時に台所の壁に向かって、時に畳の間と仕切っている襖に向かって彼女は泣いていた。茫然と見つめているしかない私には母の身に何が起こっているのか知りようもなかった。それでも幼心に何かを強く感じていた。母の涙、世界が揺れ動く経験、それは私の心の原風景となった。

*

1955年12月に出生した清を加えた家族4人は、1957年に枚方市都丘町に引っ越しをする。戦前、枚方市中宮には広大な兵器工場（工場の跡地は1950年代には小松製作所となっていた）があり、都丘町は工場で働く労働者用の宅地として造成された。町のほぼ中心にひときわ屋根が高く、舞台と観客席だけの一軒家があった。戦前、芝居小屋として建てられ、しばらく使われた建物である。祖母坂口ナヲとの和解をきっかけに転居を勧め、柴田勝正は数件の物件を紹介した。その中から塩野が選んだのが都丘町の家であり、理由は珠算教室に好条件という判断であった。

購入を決めると住宅兼珠算教室として使用するための改築工事が始まった。舞台はすべて住居用の和室に改造され、観客席は一部が台所など住居用に改築された以外、ほとんどは珠算教室になった。完成した珠算教室には同志社香里中学・高等学校で使

われていた木製の机50個ほどが入れられた。この机は椅子と一体となっていた。牧野阪から都丘町までは約3キロメートルの距離がある。牧野阪・牧野本町・片鉾・甲斐田・都丘町と続く道を午前中に恵美子は背中に清を負い、私の手を引いて歩き、大工の世話をした。5歳の私にこの道は新鮮な驚きに満ちた、新しい世界であった。塩野が片鉾本町にある浄土真宗本願寺派妙教寺の檀家になったのはこの頃である。

都丘町に転居した翌年、1958年4月に私はうみのほし幼稚園に入園した。母に送ってもらった都丘町のバス停で園のバスに乗ると、20分程で幼稚園に着いた。うみのほし幼稚園はカトリック教会の付属施設であり、初めて宗教的世界に触れた場所となった。礼拝堂に入ると荘厳な雰囲気の中に正面右の壁一面に洗礼を受けるイエスが描かれていた。絵の線も色も柔らかくて穏やかなのに、絵からは真剣さが伝わってきた。担任は片岡美代子先生であった。彼女には穏やかで優しく安心の世界があった。それはいつも頑張っていた母が醸し出す緊張感とは異質で、私に不思議で新鮮な印象を強く与えた。小学校4年生になっていたある水曜日に、友人の勝又を誘って3キロメートル程離れたうみのほし幼稚園に向かった。迷いながらもようやく幼稚園の近くに辿りついた私を認めると、片岡先生は「まあ、塩野君！」と園内から声をかけ私たちを招いて下さった。彼女は園舎で私たちにミルクとビスケット2枚を与え、「そう、そう」と言って私から近況を聞かれるのだった。「片岡先生はシスターになられた」と伝え聞いたのは、それからしばらくしてのことである。

うみのほし幼稚園に入園した翌年1959年正月から始まった柴田勝正へ新年の挨拶に伺う際も、都丘町のバス停から枚方市駅北口までバスに乗った。市駅北口から旧街道を西南の方向に向かって歩き、岡東町を抜けて三矢町に入ると間もなく右手に柴田の自宅があった。江戸時代から立ち続けていると思われる風格のある商家である。どっしりとした塗壁の中央にある引き戸を引くと、土間であった。土間に入ると奥には仕切りの壁があり、その左端にこじんまりとした引き戸があった。引き戸の前に立ち、父が「塩野です」と声をかけると、しばらくして奥様が「よう、おいでくださいました」と言って引き戸を開けてくださった。中に入るとすぐ右手に和室があり、その奥から柴田が「塩野か、よう来た、よう来た。上がれ、上がれ」と招いてくださる。すると父が私に合図をして、二人は揃って部屋にお邪魔するのであった。和室は柴田の仕事部屋兼書斎であった。あっちにもこっちにも山のように本が積んであり、本を読んでは仕事をし、仕事をしては本を読んでいるという様子であった。質屋を営みなが

ら、その頃柴田は枚方市の市議員でもあった。雄弁で正面から相手の顔を見据えると、ずばずばと大胆に話す人であった。

*

一通りのあいさつを終えると、柴田は私の方に向きなおり顔を見据えながら「うれしいやないか、塩野！」と語りかけ、「私もいささかお手伝いさせてもらった同志社香里で、今日も千名を越える生徒が新島先生の教育を受けている。こんなにうれしいことはない！」と続けるのであった。真剣な語りかけは迫力をもって私を圧倒し、その声は体と心に響き続けた。だが「うれしいやないか、塩野！」と語りかける柴田の顔が、私にはまるで子供のようにも思えた。純粋な喜びで輝いていたからである。

柴田が話していた同志社香里中学校高等学校の前身は軍人の子弟を教育する第二山水中学校である。戦後香里学園と改称していたが、この学園を1951年に同志社が合併した。柴田が「いささかお手伝いさせてもらった」というのはこの時のことで、『同志社百年史通史編第2巻』はその間のいささつを次の通り記している³⁾。

枚方市在住の交友柴田勝正（当時同志社高等学校父兄会長）が、総長事務取扱大塚節治に香里学園との合併の話を持ち込んだのはそうした時期、すなわち1950年10月13日であった。大塚は「全く突発的事件で、それでも多くの問題をかかえている同志社としては、全く余計なことであると感じたのが、偽らざる私の感情であった」と書いている。しかし、柴田をはじめ香里学園関係者は熱心であった。とくに柴田の熱情が同志社理事会を動かしたとあってよいだろう。

さて、柴田勝正は合併の話を持ち込んで以後、精力的に斡旋の労をとって奔走したが、態度の決まらない大塚は柴田に対して逃げ腰であった。同志社の内部で最初に合併に賛意を表したのは同志社高等学校校長山田貞夫であった。柴田が父兄会長だったことにもよるが、1949年に今出川校地から岩倉へ移る時の推進者であり、元大学予科長であった山田は中等学校と学校経営について独自のヴィジョンと使命感を持っていた。

同志社が香里学園合併に消極的であった理由の一つは経済的事情であった。合併に伴い必要となる資金に加えて、校舎の修理や講堂のチャペルへの改修いずれは校舎の

新築など、多額の予算を必要とした。柴田は地域の資産家であったが、合併当時借家を処分するなどしてかなりの財産を現金に換えていた。父によるとそれらはすべて同志社香里のためであり、1960年頃の貨幣価値にして「柴田さんが同志社香里のために使ったお金は2億円をくだらない」と言っていた。柴田が何度か口調を落として印象深く語った言葉がある。「なあ、塩野。人間、雨露を凌げる家があり日々の生活に事欠かなければ、それでいいんじゃないか。」それは親から継いだ財産の多くを同志社香里のために使った自分にも向けて語った言葉であったのかもしれない。

「うれしいやないか、塩野！」と並んで柴田勝正から毎回のように入聞された言葉がある。それは「世のため、人のため」である。

難しい世の中やないか、塩野。俺は先日新島先生が育てられた群馬県安中へ行ってきた。何も無い所やった。先生の青年期も難しい時代やった。あの時代、あの自然豊かな土地で新島先生が将来の日本をどんな風に考えられたかと思うと感慨深いものがあつた。新島先生も幕末という時期に安中で将来の日本のため、日本人のため尽くすことを考えられたんやないかな。

質屋というのはな、地域社会と共存共栄する商売やった。俺の祖母は大阪の質屋塩野から来た。だから、柴田と塩野は遠戚関係になる。俺が小さい頃は天満橋に行くと石町という小高い丘の上に塩野の屋敷があつて、塩野が地域社会のためいろいろと尽くしたことを聞かされたもんや。ええか塩野、おまえは大きくなったら世のため人のため尽くす人間になるんやぞ。

注

- 1) 戦後という時期が転換期にあるという時代認識については、下記を参照。
塩野和夫「日本とアジア諸国のキリスト教」(高柳俊一・松本宣郎編『キリスト教の歴史2』山川出版社、2009、228-256頁)
- 2) E. トレルチにおける総合性 (Synthese) と個性 (Individuation) による歴史認識については下記を参照。
塩野和夫「歴史認識と共同体概念—エルンスト・トレルチの共同体諸概念を手がかりとして」(「日本組合基督教研究序説」新教出版社、1995、150-169頁)
- 3) 『同志社百年史 通史編二』1411頁